

タイトル	古歌「心だに」の受容 - 神道・仏教・本居宣長の事例から -
著者	鈴木, 英之; SUZUKI, Hideyuki
引用	北海学園大学人文論集(76): 168(一)-153(一六)
発行日	2024-03-31

古歌「心だに」の受容

——神道・仏教・本居宣長の事例から——

鈴木英之

一、はじめに

中世から近世にかけて流布した古歌がある。

心だに まことの道にかなひなば

いのらずとても 神や守らん

直訳すれば「心さえまことの道にかなうならば、たとえ祈らなくても神は守ってくれるだろうか」となる。「や」は疑問の係助詞だが、諸書を見る限り、解釈にはほとんど反映されず「神は守ってくれるだろう」と解されることが多い。また「神は守らん」とするものもある。

本歌は、菅原道真（北野天神）の御詠歌として流布した。室町期の浄土僧である了誉聖罔の著書『破邪顕正義』（二三七七成立）に見えるのを最初期の用例のひとつとして、謡曲や法華経注釈など中世から引用が認められる。近世に入ると『歌林四季物語』などを通じて大いに流布したとされ、儒家神道、本居宣長に至るまでが、本歌について様々な解釈を示している。本歌の「まことの道」は仏道・神道・天道などいずれも当てはまるし、「祈らずとても」という祈祷不要論は、肯定・否定のどちらの文脈でも用いることができることから、神道や仏教、儒教や国学などの文献で幅広く引用された。したがって本歌の受容を知るためには、それぞれの文脈における「まこ

との道」とは何か、祈りは必要か否か、祈りが必要（もしくは不要）ならばその理由を明らかにしなければならぬ。

なお本歌については夙に前田勉氏による詳細な研究^{*1}があり、主に垂加神道と本居宣長の解釈が示されている。小稿ではそれに依拠しつつ、「祭礼」に着目して「心だに」の受容について述べる。

二、伊勢神宮における「心だに」解釈

近世伊勢神宮の外宮祀官である度会延佳（十七世紀）は、『陽復記』において祭礼について論じる際に「心だに」の歌について述べる。延佳は祈りの必要性を「誠」を通じて説く。

神の祈をうけたまふと、請たまはざるは其人の誠と不_レ誠とにある事なり。誠に神に祈に其しるしなきとおもふとも、身にかへりて自の誠いまだいたらざるとおもふべし。ゆめ／＼神を怨むる事なかれ。是

(一)

神道也。武王は聖人にてましませども、御病悩の時に周公祈給ふぞかし。末代の凡夫の、をかける過もなきものがほにて、神にいのる事もなく、心だに誠の道にかなひなばいのらずとても神やまもらんと云歌を、あしく心得て口にしき。誠の道にかなひたるかほなるは甚僻事なり。誠の道にかなひたる人は聖人なり。かる／＼しくおもふべからず。其上いのらずとても神やまもらん、ましていのらば猶まもらんと云心、詞の外にあるをや。^{*2}

神が人間の祈りを請けるか否かは、人間が「誠」であるか否かによるとし、願いが適わなくても、それは自らの「誠」が不足しているからだという。「心だに」の歌にいう「誠の道」にかなう人間とは「聖人」のことであり、普通の人間（「凡夫」）の心が「誠の道」にかなうことはない。だから凡夫は祈る必要があるが、祈るならば神は守ってくれるという。

延佳は「心だに」の歌を誤って理解し、祈りを軽視する風潮を諷め、普通の人間の心が「誠の道」に適うこと

はないのできちんと祈るべきだと主張する。なお「誠の道」は聖人だけがかう道だが、「聖人の祈は、金中の金のごとし。愚人の祈も、しばらく誠なるは、砂中の金なれば、砂こそとらざらめ金はとらざらんや」と、愚者である普通の人間の祈りの中にも、砂の中の金のように「誠」があり、それを神は受け取るので、普通の人間の祈りにも意味があるのだという。

ここで確認したいのが「祭」と「祈」の違いである。

答曰、孔子のたまふごとく其祭べき所の神ならずしてまつるは、へつらひなり。しかれど、祭と祈と分別ある事ぞかし。伊勢両大神宮にも三姓の氏人として、大中臣は祭主と官司に任じ、荒木田と度会は祢宜に補し、勅命によりてまつる。全く自分の祭にはあらず。其神の後裔又は祠官の祭は凡人とは隔別なり。（中略）祈とは、或は主君父母の病悩などを、臣下忠誠の情を以いのり、又は孝子迫切の心を以祈ば、などか其誠を神も請たまはざらんや。或は天下国家、又身の上の災害を、いまだきざゝざるさきに神

に詣て祈り、又坐ながらも祈るは、なくてはかなはぬ道理なり。我國のみにあらず、もろこしにも、天子ならでは天をば祭給はざれども、庶人も天に祈にて其理知べし。^{*3}

延佳によれば「祭」と「礼」には区別があるという。「祭」とは、私心（「自分の祭にはあらず」）はなく、伊勢神宮の祀官である大中臣氏・荒木田氏・度会氏が勅命によつて祭祀を行うようなものだという。これに対して「祈」は、主君や父母の病の平癒や、天下国家や身上の災いを神に願つて避けようとする、私的に何らかの出来事の達成や、好ましい状態を祈願することだと言うことができる。

周知の通り、伊勢神宮は私幣禁断を旨とし、私的な祈祷を禁じてきた。これに関連するのが内清浄・外清浄である。

夢窓国師は嘉暦元年（一三二六）に伊勢神宮を参詣した際に外宮一祢宜であつた度会朝棟から、伊勢神宮参詣の際には内外の清浄が必要で、外清浄は身体の清浄、内

清浄は、名利の望みを持たないことを聞いている。

この社に詣づる時、内外の清浄あり。外の清浄とは、精進潔斎して、身を穢惡に触れざるなり。内の清浄とは、胸中に名利の望みをおかざるなり。世の常、幣帛を捧げ、法楽をなすことは、皆この名利の望みを祈り奉らむためなれば、内清浄にあらず。この故にこれを制し給へり。^{*4}

さらに、坂士仏『伊勢大神宮参詣記』（一三四二成立）では、外宮祀官・度会家行の見解が示される。

就レ中当宮参詣のふかきならひは、念珠をもとらず、幣帛をもささげずして、ここにいのるところなきを内清浄といふ。潮をかき水をあびて身にけがれたる所なきを外清浄といへり。内外清浄になりぬれば、神のこころと吾こころと隔なし。既に神明におなじ。しからば何を望てか祈誓の心あるべきや。これ真実の参宮也とうけ給はりし程に、渴仰の涙とど

めがたし。^{*5}

注目すべきは、内外清浄になれば、神の心と我が心に隔てがなくなり、神明と同じになるため、とりたてて祭ること（念珠や幣帛）や、祈誓の心（私的な祈り）は必要ないとするものである。人の心と神との一致を説くもので、伊勢神道書『御鎮座伝記』に「人乃天下之神物也。莫レ傷二心神一」、両部神道書『神祇秘鈔』に「衆生之一念（是又神体也）」などと見えるもので、中世からこうした思考が諸書に認められる。^{*6}

延佳は、伊勢神道の担い手である外宮祀官度会氏であること、また坂士仏の『参詣記』を校訂・版行していることから、心神一致の思想についても当然知っていたものと考えられる。事実『陽復記』の他の箇所では、伊勢神道書ではないが、吉田兼俱『神道大意』の記述「心は神明の舍」のくだりを引用し、「もとより人人の心中に、神はやどり、ましませども」などと、人々の心中に神が宿ることを説いていた。こうした心神一致の思想は、林羅山や山崎闇斎など近世の儒家神道家においても重要な

テーマとして論じられたことが指摘されている。^{*7}

しかし、延佳は安易に心神を一致させる論調を否定する。中世の心神一致論によるならば、究極的には祭祀も祈祷も不要になって（否定されて）しまうが、延佳は「心だに」の歌を認めながらも、心神が一致できる存在を聖人に限定することで、祈祷の必要性を示すのである。

また延佳は「祭」の必要性についても論じている。

問曰、心は神明の舎なれば、一心の外に神はなしといへば、祭などと云事も無用の事、迷の者のする事也と云人あり、いかに。答曰、一心の外に神なしとは、一心の理の外に異なる神はなしとの事なり。（中略）あしく心得て、宗廟社稷の神はなきものなり、祭礼もいたづら事なりなどいふやからは、一心の量をせばく見て、一向偏見のものなり。（中略）又外に神ありとのみ心得て、本心をわすれたる人は、余所の宝を羨尊ぶに同じ。何の益なき事なり。其上神明の教にもそむくものなり。よく工夫すべし。^{*8}

ここでは人間の心が神明の住み家であるのならば、祭は不要ではないかという問いに対して、宋学の理気説に基づく解釈がなされる。「神」は「理」であり「心」である。「理」とは物の本性・本質のことであり、万物に内在するのだから、「理」である「心」のほかに「神」はいない。だがこれは、「理」という普遍的な観念からの心神一致が説かれているのであり、そのまま祭祀不要という訳ではない、祭るべき神は存在するとの立場をとる。^{*9}

延佳は、外宮祀官の一族である度会氏のひとりとして、低迷していた近世伊勢神宮の神道論を再興させるため、中世の伊勢神道を儒教によって再解釈した人物である。中世からつづく「心だに」の古歌の受容のすがたからは、心神一致の思想を受け継ぎながらも、それを時代に合わせ変化させていく、近世的な受容のすがたをうかがい知ることができるのである。

三、仏教における「心だに」解釈

「心だに」の歌は、仏教で用いられる場合、仏道修行の

妨げとなる現実生活に対する加護（物資が充足する、寿命が延びるなど）が諸神より与えられるという文脈で用いられることが多い。神とは異なり、基本的に仏は祭り鎮める対象ではないので、主に「祈」の面からの受容・考察がなされることに特色がある。

たとえば室町期の学僧・了誉聖岡は、『破邪顕正義（鹿島問答）』「第四 念仏行者不可祈現世福樂之事」において「北野天神御詠歌」として「心だに」の歌を引用し、念仏行者に付随する現世利益の素晴らしさについて論じる。

女云、夫往生極樂最後臨終時也。現世存程今生福樂神明祈請有_二何失_一耶ト云フ人アリ。此事如何。

翁云、此事不可也。（中略）若厭心切ナラハ、何今生福樂祈凝ラサン。若欣心真アラハ、何_レ後世ノ引接ニ疑_レ懷_{カン}。若心行具足_{シテ}真実ノ人ナラハ、不_{トモ}レ祈ラ神明ハ冥加随遂シ玉フベシ。是_レ故ニ北野天神御歌云、心タニマコトノ道ニカナヒナハ

イノラストテモ神ハマモラン

（六）

其_ノ上五増上縁ノ中ニ有_リ二現世護念増上縁_一。追可_レ尋_レ之_云^{云*10}

ここでは、現世での福樂を神明に祈請することを否定し、此の世（穢土）を厭い、浄土往生を願うのならば、今生の福樂を祈る必要はないとする。現世での福樂を神明に祈請することは、専修念仏の立場からすれば勧められない。またこの世（穢土）を厭い、浄土往生を願うのならば、そもそも今生の福樂を祈る必要はない。「マコトノ道」とは、阿弥陀仏による極樂往生を信じ、そのために必要な「行」である念仏に専念することと考えられ、もし浄土を求める心と念仏行を具足した真実の行人であるならば、たとえ祈らずとも神々は加護を与えてくれるという。

仏を深く信じ、善に励む人は自ずから神仏の加護を得るといふ展開は、古くからある考え方で、『法華経』や『阿弥陀経』などにも見られる。例えば中国浄土教の大家である善導の『観念法門』によれば、「護念経」（『阿弥陀経』）を修すれば、悪鬼・鬼神を退け、不慮の病や死、厄災を

無くし、あらゆる災いや障害が消えるという（浄土宗全書四、二二九頁上）。

阿弥陀仏や浄土を深く信じる人は自ずから神明の加護を得るといふ議論は、夙に親鸞に認められ、

仏法をふかく信ずるひとをば、天地におはしますよろづの神は、かげのかたちにあへるがごとくして、まもらせたまふことにて候へば、念仏を信じたる身にて、天地の神をすてまうさんとおもふこと、ゆめゆめなきことなり。^{*11}

と、仏法の行者を守る存在として天地の神の存在を認めていた。

また専修念仏と神々との関係を説いた『神本地之事』^{*12}（成立年未詳。一四一三写）や、浄土真宗の学僧存覚の『諸神本懐集』（一二三四成立）では、より具体的に現世利益との関連が説かれ、同説は浄土系諸派においてある程度流布していたものと推測される。たとえば『諸神本懐集』では、

ヒトヘニ弥陀一仏ニ帰シタテマツリテ、浄土ヲネガハハ、モロモロノ神明ハ昼夜ニツキシヒテマモリタマフベキガユヘニ、モロモロノ災難モノゾコリ、一タノネガヒモミツベキナリ。権社ノ神ハヨロコビテ擁護シタマフベシ。^{*13}

と、阿弥陀仏に帰依して浄土往生を願うならば、諸神は常に行者に付き従うため、諸の災難も取り除かれ、一つ一つの願いも叶うのだと、ほぼ同様の説が展開されている。

他の例も見てみよう。『妙法天神経』は、菅原道真が配流の際に詠んだ歌を集め、『法華経』二十八品それぞれに対応させたものである。北野天神が詠んだ「心だに」の歌は『法華経』「勧発品」の「諸仏護念」という記述に対応するものとして示されている。

勧発品

一者為諸仏護念二者殖諸徳本三者入正定聚四者發救一切衆生之心

心たにまことのみちにかなひなは

いのらすとても神やまもらん^{*14}

勸発品の記述のうち、ここでは「仏」が守護すること（『法華経』でいう「諸仏護念」）の歌による証明として「心だに」の歌が用いられている。「神」ではなく「仏」の護念の話であるが、本地垂迹説を背景とした議論であり、神仏ともに言わんとするところは同じである。この意識は中世～近世の法華経注釈で共有され、日澄『法華経啓運鈔』（一五世紀末）や日将『略法華経附和歌』（一七世紀）にも「諸仏護念」の旨を顕すものとして本歌が示されていることが指摘される。^{*15}

近世の『妙法天神経』の注釈書である『妙法天神経解釈』（宝鏡寺蔵、一七三〇年元賢写）には、まず勸発品と「心だに」の歌が示されたうえで、次のような注釈が施される。

勸発品

一者為三諸仏一護念セラル。二者植三皇諸徳本一、三

(八)

者入三正定聚一、四者發三救一切衆生之心一。釈曰、(中略)

心たに誠のみちにかなひなは

いのらすとても神や守らむ

釈云、それ誠の道は、惣して神の本体なれば、賤き口を以て、判するも猶恐多し。誠の道にかなふといふこと、もろ人の成りかたきみち成るへし。(中略) 誠と云は、私の情なく、天の道にかなふをいえり。

若天の道に叶時は、神の道、仏の道、聖人の道、にもかなえり。即是神仏の御心となれば、不祈とても、神は守らむとの御言の葉、猶とうとき、御ことならずや。唯凡夫の人は、欲心私情、誠をくらまし、暫も誠に成かたし。此故に仏方便して、禪定に入しめ、或は空を觀せしめ、或は念仏唱名に我を忘れしめ、或は誦經陀羅尼、機に隨て修すれば、自然に心空して、我を忘れ、欲を離れ、一切の世念、暫時休するも、おのつから聖人の域に入り、神の守、仏に護念せられんこと、たゝならぬ徳に、あらずや。皆是宿世の善根のなすわざ也、と可知。^{*16}

「誠のみち」の「誠」とは、私情なく「天の道」にかなうことを意味し、もしこの道に「かなふ」時は、神・仏・聖人の道にもかなう。天の道にかなうことこそ神仏の御心であるから、祈らなくても神は守護してくれる。しかし、凡夫は欲心や私情をもつため「誠」に成りたい。そこで仏は方便して禪定や空観、念仏唱名、あるいは誦經陀羅尼などを修させ、凡夫に「我」を忘れさせ、「欲」を離れるようにさせる（＝私情をなくす）ことで「聖人の域」に入らせ天の道にかなうようにしたという。

ここでは「私の情」がないことを、仏教でいう「無我」と同義とする。仏道修行により無我の境地に入り、仏と成ることを、誠の道（天の道）にかなうこと、すなわち「聖人の域」に入ることと解釈しているのである。『妙法天経解釈』は、「心だに」の歌を認めながらも、解脱して仏にならないと神と通じないのであるから、先述の延佳同様に、祈りを不要とするハードルはかなり高いものがあるだろう。

『妙法天経』は「経」という体裁をとりながら、「誠のみち」を「天の道」として普遍化し、そのもとに仏道

すらも包摂しようとする注釈の志向は興味深い。これらは近世の儒仏一致、神儒一致の流れの中で生まれた言説ということができるだろう。

四、本居宣長の「心だに」解釈

国学者・本居宣長は『古事記伝』『直毘靈』において、「心だに」の歌を「儒・仏」の説として否定していた。宣長の「心だに」論については夙に前田勉氏による詳細な研究があるが、小稿では少し視点を変え、祭礼論の立場から宣長の「心だに」の受容について考えてみたい。

宣長は『玉勝間』『北野の御詠といふ歌』において、『歌林四季物語』に収載される「心だに」の歌について「例のほうしの口つき也」^{*18}すなわち僧侶の詠みぶりであり、文法的にも問題があると批判的な論評を加えている。また『玉勝間』『神祇の歌』では、

又世に何がしの神の御歌ぞ、くれがしの社の御詠ぞ
などいふがあるは、おほくはほうしのともがらの、

世の人を、おのが道に引入れむ料に、いつはり作れる物也。さるによりさやうの歌は、神の道の意にはかなはず。皆仏意なるぞかし。^{*19}

と、「心だに」のような神の御詠歌は、その多くは人々を仏道に引き入れるために作られた偽りの歌であり、「神の道の意」にはふさわしくない、仏意なのだと断じている。ではなぜ「仏意」なのか。

宣長は『古事記伝』一「直毘霊」において「心だに」の歌を引用し、神の道には背いており、祭祀は必須と断じる(以下、本章における『古事記伝』の引用は一続きのものであるが、論述の都合上分けて示す)。

天皇の、大御皇祖神の御前を拝祭坐がごとく、臣連八十伴緒、天下の百姓に至るまで、各祖神を祭るは常にて、又天皇の、朝廷のため天下のために、天神国神諸をも祭坐が如く、下なる人ども、事にふれては、福を求むと、善神にこひねぎ、禍をのがれむと、悪神をも和め祭り、又たま／＼身に罪穢もあれ

(10)

ば、祓清むるなど、みな人の情^{ココロ}にして、かならず有べきわざなり。然るを、心だにまことの道^{ミチ}にかなひなば、など云めるすぢは、仏の教へ儒^{コノコ}の見^ミにこそさることもあらめ、神の道には、甚くそむけり。^{*20}

天皇から百姓に至るまで祖神を祭ることは常のことであるし、天皇が、朝廷・天下のために諸神をお祭りするように、下々の人たちも、福を得ようと善神に祈ったり、禍を逃れようと悪神を鎮め祭ったりする。これらはみな人の心情からして必ずあることである。それなのに「心だに」などと言って祭祀を行わないようなことは、仏教や儒の考えではそういうこともあるだろうが、「神の道」には、ひどく背いているという。

本箇所での「祭」と「祈」の区別は曖昧なようだが、いずれにせよ祭祀は必須だという。宣長によると、異国では、神を祭るにも道理を優先した様々な議論があり、中には淫祠として誡めることもあるが、みな人間のさかしらだという。宣長はいふ。

凡て神は、仏などいふなる物の趣とは異にして、善神のみにあらず、悪きも有て、心も所行も、然ある物なれば、悪きわざする人も福^{サガ}え、善事する人も、禍^{マガ}る事ある、よのつねなり。されば神は、理^{アタリ}の当^{アタラシ}くもて、思ひはかるべきものにあらず、たゞその御怒を畏みて、ひたぶるにいつきまつるべきなり。

神とは、仏とは異なり、善神も悪神もいるので、人間の行いの善い悪いに関わらず、幸運なこと、不幸なことがあるのが世の常である。だから（異国の仏教や儒教のように）道理に合致するか否かという点で神を思い測ることなどできず、我々人間はただ神の怒りを畏れて、ひたすらに齋き祭らなければならないという。

宣長にとって、神は人間の推し量り（人間の考える道理）を超えた存在であり、「心だに」のように心が通じているから祭祀を行わない、ということはあるにない。わからないからこそ、祭祀は必須なのである。

それではどのように祭祀を行うべきか。

されば祭るにも、其のこゝろばへ有て、いかにも其神の歎喜び坐べきわざをなも為べき。そはまづ万を齊忌清まはりて、穢悪あらせず、堪たる限美好物多に献り、或は琴ひき笛ふき歌舞ひなど、おもしろきわざをして祭る、此れみな神代の例^{アタリ}にして、古の道なり。

宣長によれば、神を祭る時は、ひたすら齋き祭るといふ気持ちをもつて、何とかして神が喜びそうなことをしなければならぬという。それは、まず万事を齋み浄めて穢悪をなくし、最も美味な物を多く献上し、琴を弾き笛を吹き歌い舞うなどの面白いことをすることで。これらはみな神代の例であつて「古の道」なのだという。

そして宣長は結論づける。

然るをたゞ心の至り至らぬをのみいひて、献る物にもなすわざにもか、はらぬは、漢意のひがことなり。

「心だに」の歌のように、ただ心が至る至らないという

ことだけを気にして、神への献上も祭祀も行なわないことは、漠意による間違いなのだという。これは先に延佳が祈りの結果が伴わないのは自身の誠が不足しているからだとして、その原因を祈る人間側に置いていたのとは大きな相違と言えよう。あくまで神に判断の基準があり、しかも人間にはその基準はわからないのである。同様の議論は『玉くしげ』にも見られる。

惣じて世中の事は、神の御霊にあらではかなはぬ物なれば、明くれ其御徳をわすれず、天下国家のためにも、面々の身のためにも、もろくの神を祭るは、肝要のわざなり。善神を祭りて福を祈るは、もとよりのこと、又禍をまぬかれんために、荒ぶる神をまつりやすも、古の道なり。^{*21}

と、世の中の出来事は神の御霊（産巢日神）によって成されたものであるので、常に神の御徳を忘れず、天下国家のためにも、それぞれの人々のためにも、諸神を祭ることが肝要とされる。^{*22} 善神を祭って福を祈るのはもちろ

（一一）
ん、また禍を免れようとするために、荒ぶる神を祭り鎮めるのも「古の道」だという。

然るを、人の吉凶禍福は、面々の心の邪正、行ひの善悪によることなるを、神に祈るは愚なり。神何ぞこれをきかんとやうにいふは、儒者の常の論なれども、かやうに己が理窟をのみたてて、神事をおろそかにするは、例のなまさかしき唐戎の見識にして、これ神には邪神も有て、よこさまなる禍のある道理を知らざる故のひがことなり。^{*23}

それにも関わらず、「人の吉凶・禍福は個々人の心の邪正や行いの善悪によるものだから、神に祈るのは愚かである、神が願いを聞くことはない」などと、自らの理屈ばかりを主張して神事を疎かにすることは儒者のいつもの見解である。神の中には邪神もいて、理不尽な禍がある道理を知らないからそのようなことを言うのだと批判を加えている。

このように宣長は、神は人智を超えた存在であり、吉

凶禍福を祈っても意味はない。それが適うか否かは人間の道理では計り知れない、ただ神を畏れひたすらに祭るしかないとの態度を示し、それゆえに「心だに」の歌は、^{*24}神仏と心を通じると言う仏教や儒教のさかしらから詠まれたものだと言判断するのである。

五、おわりに

如上、雑駁な議論になってしまったが、古歌「心だに」の受容をめぐる、中世から近世まで、神道・仏教・国学（宣長）の諸書を概観してきた。

近世の伊勢神宮の祀官である度会延佳は「心だに」の歌の内容を認めながらも、「まことの道」は聖人だけが到達できるものと限定することで、凡人の祈りを必須とし、また祭祀も必要との立場を示した。中世の心神一致の思想に端を発するものだが、中世の議論そのままでは祭祀も祈祷も不要になってしまうのに対して、延佳は「心だに」の歌の解釈を通じて、祈祷と祭祀が必要との態度を示したことに特色がある。

仏教書においては、「まことの道」とは仏道のことであり、具体的な内容としては念仏であったり、『法華経』の読誦であったり様々だが、いずれにせよ心が仏道に通じるならば祈りには必要ではなく、神仏から現世の加護を得ることができるとすることに特色がある。仏は基本的に鎮め祭る存在ではなく、祈る対象であるため、祭祀に関する記述は認められず、主に現世利益のための祈りに関心が向けられている。中世の浄土僧・了誉聖岡の『破邪顕正義』では、専修念仏の立場を追求するうえで、神明の加護（現世の福楽）が自ずからもたらされるため、とりたてて神に祈る必要はないとする。だが近世の天神経の注釈書である『妙法天神経解釈』において、心が「まことの道」にかなうことは仏に成ることと同義であり、普通の人間には難しい、それゆえに祈りは必要、との結論が導き出されているのは、延佳が祭祀を必須としていたこととともに、近世における「心だに」の歌解釈の新たな展開として注目されよう。

本居宣長は、「心だに」の歌を否定し、神は人間の道理で理解できる存在ではないため、祈りが通じる通じない

に関わらず、ただ神を鎮め祭るしかないという立場をとる。宣長にとって祭祀は必須であり、人間の道理によって判断し、歌にあるように心の至る至らないを問題として祭祀の不要論を説く儒者や仏者の立場は否定すべきものであった。

上記は同じ古歌を引用しながらも、「心」「神」「祈り」という普遍的なテーマについて、それぞれの立場からの解釈を示していた。それは神と人間との距離を測る営みであったとも言えるだろう。中世では心と神との距離をゼロにして、神の存在を内在化させることで、実態はどうであれ、究極的には祈りは不要としていた。また親鸞や聖岡のように念仏に専念させるために、現世利益のための神仏への祈願を不要とする立場もあった。しかし近世では、度会延佳は「まことの道」にかなうのは聖人だけとして祈りと祭祀を事実上必須としていたし、『妙法天経解釈』では我を無くした存在、すなわち無我の境地へ到達した存在「仏であることが「まことの道」に心が通じる条件として示されるなど、古歌の内容自体は認めながらも、祈らずに神と通じることは困難で、現実的

にはありえないと判断していた。一方、宣長は古歌自体を否定し、人間では神の意志は測り知れないとし、ただひたすらの祭祀を求めた。

これら近世の用例からは、中世の観念的で素朴な心神一致の思想とは異なり、現実的に祭ることや、祈ることを念頭に置いたうえで人が神仏と通じ合うことの難しさをうかがうことができる。人間と神仏との距離は、時代の特徴をあらわす重要な論点である。神仏といかに通じ合うかをテーマとする「心だに」の古歌からは、各々の時代と立場による神仏と人間との距離感の違いを垣間見ることができるのである。^{*25}

(注)

- *1 前田勉「宣長における「心だに」の論理の否定——垂加神道と宣長の関係——」(同『近世神道と国学』、ぺりかん社、二〇〇二)。初出は『日本思想史学』三〇、一九九八。
- *2 度会延佳『陽復記』、日本思想大系『近世神道論 前期 九) 参照。

- 国学』、一〇三頁。
- * 3 度会延佳『陽復記』、日本思想大系『近世神道論 前期国学』、一〇二―一二三頁。
- * 4 夢窓疎石『夢中問答集』上「七、神仏の効験」、講談社学術文庫、四八頁。
- * 5 坂士仏『伊勢大神宮參詣記』、『群書類従』二、三八七頁。
- * 6 『御鎮座伝記』（神道大系『伊勢神道（上）』、二三頁）。『神祇秘鈔』卷中「神仏本迹事」（中世神祇信仰研究会『神祇秘鈔』註解（二）——卷中・第一条―第一六条―）、『論集アジアの文化と思想』一二、一三九頁）。中世における心神の一致については、伊藤聡『中世天照太神信仰の研究』（法藏館、二〇一一）、同『神道の形成と中世神話』（吉川弘文館、二〇一六）参照。
- * 7 注1前掲「宣長における「心だに」の論理の否定」参照。
- * 8 度会延佳『陽復記』、日本思想大系『近世神道論 前期国学』、一〇六頁。
- * 9 平重道「近世の神道思想」参照（『近世神道論 前期国学』、五三九―五四〇頁）。
- * 10 了蒼聖岡『破邪顯正義』、浄土宗全書一二、八一―三頁下
- （四頁上）。
- * 11 建長六年（一二五四）九月二日付「念仏の人々御中へ」、真宗史料集成一、四五二頁。
- * 12 『神本地之事』については、北西弘「諸神本懐集の成立」（同『真宗史の研究』永田文昌堂、一九九六）参照。
- * 13 存覚『諸神本懐集』本、日本思想大系『中世神道論』、一九二頁。
- * 14 『妙法天神経』（道明寺本）。原本未見。国文研マイク口を参照した。
- * 15 小峯和明編『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』、笠間書院、二〇〇一）に、山本五月氏の指摘がある。日澄『法華経啓運鈔』（貞応三年刊本、国文研マイク口を参照）、日将『略法華経附和歌』（山下哲郎「翻刻『略法華経附和歌』（二）」（『駒澤國文』三一、一九九四、二九九頁）参照。なお『法華経直談抄』七末・一七では、『法華経』安樂行品の「第三法如是、智者応守護」を意味する歌とされ、対応箇所が異なっている。安樂行品では、他人を嫉妬せず、軽んじたりせずに真実の行に励めば、智者は守護するし、無量衆に敬われるという。
- * 16 注15前掲『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』、三六一―二頁。また山本五月氏の解説参照。

*17 『歌林四季物語』三、続群書類従第三二上、四六七頁。
『四季物語』は貞享三年(一六八六)に刊行されたもので、
鴨長明の作とされるが諸説ある。

*18 『玉勝間』「北野の御詠といふ歌」、本居宣長全集一、二
六八頁。「神や」は「神は」が正しいと、助詞の用法につい
て批判する。小稿における宣長の著作は筑摩書房版『本居
宣長全集』を用いた。以下同じ。

*19 『玉勝間』「神祇の歌」、本居宣長全集一、七五頁。

*20 本居宣長『古事記伝』巻一、本居宣長全集九、六一頁。

*21 本居宣長『玉くしげ』、本居宣長全集八、三二二頁。

*22 宣長は、産霊神(高御産巢日神・神産巢日神)によって
万物が生成され、また凶事は禍津日神によって引き起こさ
れるとする。こうした近世における神話創造の営みについ
ては、山下久夫「本居宣長と平田篤胤は神道をいかに再構
築したか」(『現代思想』四五―二、青土社、二〇一七)、斎
藤英喜「近世神話としての『古事記伝』——「産巢日神」を
めぐって」(『文学部論集』九四、二〇二〇・三)など参照。

*23 本居宣長『玉くしげ』、本居宣長全集八、三二二頁。

*24 ただし宣長は、人間の理で判断できないからといって
そのまま打ち捨てておくことを「ひがごと」として否定す
る。わからなくとも最大限に神々の探求を行うことが、神

代に定まった「人の道」であり、その結果として理解でき
ないならば、仏教や儒教のように強引に説明するのではな
く、判断を放棄して受け入れるのだという。その意味にお
いては、人間は常に神に対して対話を試みているのである。
「人も、人の行ふべきかぎりをば、行ふが人の道にして、そ
のうへに、其事の成と成ざるとは、人の力に及ばざるところ
ぞ、といふことを心得居て、強たる事をば行ふまじきな
り。然るにその行ふべきたけをも行はずして、たゞなりゆ
くま、に打捨おくは、人の道にそむけり。此事は、神代に
定まりたる旨あり」(『玉くしげ』、本居宣長全集八、三二〇
頁) 参照。

*25 注1前掲前田論文でも指摘されるように、近世におい
ても心神合一を強調する動きはあるし、宣長の言うように、
「心だに」の歌をそのまま受容するほうが多数派かもしれ
ない。用例を収集したうえで、今後も慎重な検討が必要と
なるだろう。

(付記) 本研究はJSPS科研費 JP21K00093の助
成を受けたものです。